金沢に生きる家。
金沢で生きる伝統。

こころで点てるお茶、個性で建てる住まい。

金沢に暮らす人が古くから嗜んできたお茶。
祖父の代より金沢で裏千家流の
茶道を教える大島宗広氏と、
ほそ川建設社長・細川顕司が
金沢における茶道の歴史や、
お茶のこころなどについて語りました。

お茶を中心に栄えてきた茶道都市・金沢。

細川　金沢は茶道を嗜む人口比率が全国でトップクラスだと聞いたことがあるんですが、お茶が盛んなのはなぜですか。

大島　もともと前田利家、利長が千利休の弟子だったんです。そして三代目の利常が、茶人や茶道具をつくる職人たちを京都などから招き、さらに文化的な嗜みを武士だけでなく町人にも奨励したんです。そうして、お茶が金沢の暮らしの中に浸透していったのだと思います。だから金沢の町家には大なり小なり茶室がけっこう残っています。

細川　武士に限らず町人もお茶を嗜んだことで、今もお茶が盛んなのですね。今でも新築される方から、茶室を作って欲しいと言われることがあるのですが、茶室の定義とは何ですか。

大島　お茶ができれば、お茶室です。だから三角形の茶室もあれば、ドーム状の茶室もあります。基本さえ踏みはずさなければ何でもできるのがお茶でして、伝統なものと思われがちですが、実際は常識を壊してきた積み重ねが茶道なんです。

細川　茶室は格式あるイメージがありますが、つくる人の個性だったり創意を自由にあらわせられるんですね。

ほそ川建設
代表取締役　細川　顕司
1978年金沢市生まれ。大学卒業後に(株)大林組に入社。2008年にほそ川建設に入社し、2015年から代表取締役社長に。

裏千家
准教授　大島　宗広
1974年生まれ。二十歳から茶道をはじめ、二十五歳で教授者に。茶道を教える傍ら、熊本などの被災地でお茶を通じたボランティア活動も行う。

「和敬清寂」が示すお茶のこころ。

細川　私たちの考える家づくりは、誰がどこに建てても同じ家を建てることではなく、お客様と打ち合わせをして、お客様の個性を反映した住まいを一棟一棟提供することが基本だと思っています。お茶の場合も、その人その人にあわせて点てるのでしょうか。

大島　お茶も、人の顔を見てからでないと点てられませんから、飲み慣れている方に出すお茶と、飲み慣れていない方に出すお茶では、濃さを変えたりしています。

細川　そんな細やかな気配りをされているんですね。

大島　茶道には「和敬清寂」という、お互いをリスペクトし、精神的に清らかな状態であることをあらわす言葉があるんですが、家づくりにも通じる言葉かもしれませんね。

細川　どの文字も家づくりに通じる部分があります。

客人への想いを「しつらい」であらわす。

細川　お茶では、しつらいを大切にするということを聞いたことがあります。

大島　お客様に喜んでいただけるように、季節の花を飾ったり、お茶碗も絵が描いてある物なら季節にあったものを選んで、その時のためだけのしつらいをします。それから風情を感じながら茶室に入っていただけるように、茶室に通じる露地は、庭木や飛び石を配してつくられています。

細川　世俗から離れた空間に誘うためのアプローチが露地なんですね。以前に、客間につながる空間を露地に見立てて、屋内に玉砂利や飛び石を配したことがあります。

大島　露地はお客様に喜んでいただくための一つのもてなしだと思うのですが、その客間につながるアプローチには、まさに和敬清寂が息づいていると思います。